

申し込む回数が多かったか集計できるようになり、購入雑誌見直しの参考データとして利用できるようになりました。また、手作業で書類作成したり、わざわざデータ入力していた会計処理も、蓄積したILLレコードを利用して短時間でできるようになりました。

さらに、NACSIS-ILLを介して図書館間でデータ（雑誌名やページ数など）のやり取りをするための作業画面を自由に設計できるようになりました。繰り返し使用するコマンドをボタンで用意し、コード参照ファイルによってコード確認の手間を省き、入力作業を簡素化することができました。

ほかにも、他大学からの申し込みを受け付ける作業帳票にOPACのデータを取り込んだり、NACSIS-CATを利用してNACSIS-ILLには参加していない図書館への申込書を作成するなど、新しい試みもあります。

これらは、利用者の皆さんの目には直接見えない変化ですが、担当者の能率が上がり、図書館・室のサービス全体の向上につながることが期待されます。

3. ふりかえって

今回のリプレースで、京都大学は全国に先駆けて新しい通信プロトコルで学術情報センターに接続しました。まったく新しく作成したシステムだったので、果たしてうまく動いてくれるかどうか、不安な中で4月14日を迎えました。

通常、システムの切替時期はしばらくサービスを停止することが多いのですが、今回の切替は一夜のうちに終われ、一日もサービスを停止することなく完了できました。新システムも大

きなトラブルなしに動いてくれて、学内の利用者の皆さん、他大学から申込まれる皆さんにご迷惑をおかけすることなしに新しいスタートを切れたことを、ILLワーキンググループのメンバー一同喜び合いました。開発者、京大のスケジュールに合わせて準備を進めていただいた学術情報センター、附属図書館および各部局図書館・室のILL担当者の皆さんのご協力に感謝します。

個人的には、ユーザとしてシステム開発に参加させていただいたのは初めての経験でした。日常業務も行いながら要望を出したり動作確認をしていくのは大変でしたが、自分の提案したアイデアが実現していくのは楽しいことでもありました。以前のシステムが不自由だった分、こうしたら便利なのではないか、という要望をたくさん出せました。まだNACSIS-ILLを利用していない図書館・室の方々にも、ぜひこの新システムの便利さを味わっていただきたいと思っています。

4. 今後

新ILLシステムによって学内ILLのデータ処理も可能になりましたが、学内ILLについては制度自体を見直す時期に来ているかもしれません。

なお、ILLシステムの開発は今も続いています。現在は、図書館まで足を運んで申込書を書いていただかなくても、インターネット上で申し込めるシステムを開発中です。近いうちに「ドキュメントオーダーシステム」としてご紹介できることと思います。

（こだま ゆうこ：相互利用システムWG

医学図書館閲覧掛）

京都大学電子図書館の現在

後 藤 慶 太

1. 概要

本学電子図書館は、平成10（1998）年1月6日に稼働し、同年3月2日の披露式をもって本

格運用を開始した。「机の上に京都大学」をキャッチフレーズに、ここにアクセスすれば居ながらにして本学の森羅万象がわかるシステムを

目指している。それはまだ発展途上であるが、本格運用以降、本年4月までの間に、延べ3,247,000人、月平均25,000人がアクセスし、海外からの利用もその4%を占めている（英語圏を中心に76カ国から）。特に、国宝「今昔物語集」、維新資料をはじめとする重要文化財・貴重書の画像や後述する学内刊行物へのアクセスが顕著である。また、視察に訪れた機関も100を越えている。

2. 電子図書館システム

富士通株式会社の電子図書館システムiLismindsを導入している。導入後も改良が施されており、システムとしてはまずまず安定していると言えよう。テキスト系コンテンツ（以下、単にテキストとする）がまだ少ないため、その機能や検索エンジンに対するきちんとした評価を出せていない状況である。

3. 電子図書館の4つの柱

①情報発信

貴重資料画像を中心に、京都大学百年史、京都大学博士學位論文論題一覧、樋口一葉作品集等のテキストも増えてきている。現在公開中の貴重資料画像はおおよそ47,000枚あり、今年度公開予定のものを合わせると80,000枚近くに達し、さらに今年度作成計画中のものも加えると140,000枚を越える大きなデータベースとなる。今後、資料の解説や現代語訳、研究成果等の付加価値を付けていくべきか、あるいはあるがままのデータだけ提供すればいいのか、といったことを検討する必要がある。また、詳細画像については、現在は簡単なコピーライトを表示しているだけで、その二次利用について一抹の不安を覚える。電子透かし等の技術が安価で提供されることが待たれる。

②情報配信

ネットワーク対応のCD-ROMやElsevier社の電子ジャーナル、外国語雑誌目次データベ

ース（SwetScan）等を学内向けの学術情報として提供している。電子ジャーナルや各種データベースに対する要望は高く、今後それらをどのように増やしていくか、予算や会計制度上の解決しなければならない課題がいくつかある。

③電子出版サポート

学部の紀要など本学が創造する学術情報の電子化を支援するというものである。総務部広報調査課、同じく国際交流課との協同により、学内刊行物を2点公開している。

④高度な検索・ナビゲーション

テキストの全文を対象とした検索や、キーワードを同義語・訳語に展開させて検索することが可能で、電子図書館専用ブラウザを使えば、データを本の形にして読んだり（縦書き表示も可）、付箋を貼ったり、朗読をさせたりすることができる。また、テキストには自動翻訳機能（和・英訳）が備わっているが、その辞書や能力の強化が望まれる。

4. 電子図書館とは何か

本学には、電子図書館稼働以前から電子図書館研究会による電子図書館実験システムAriadneの開発経緯があり、筆者も95年頃から館内の電子図書館ワーキンググループに属してきたが、その当時から今に至るまで電子図書館というものに対する明確な像を結べないままで来ている。はたして電子図書館が従来の図書館を駆逐するものなのか、従来の図書館と融合し、強化していくものなのか。電子図書館専門委員会でも中期展望を検討するワーキンググループが中間まとめを提出したところで、これから本格的な議論が始まるであろう。

京都大学電子図書館は、その名のとおりに附属図書館の単独事業ではない。全学的な協力のもと、より良いシステム、より豊富なコンテンツを持つ電子図書館になるよう期待したい。

（ごとう けいた：電子図書館システムWG

附属図書館情報サービス課参考調査掛）